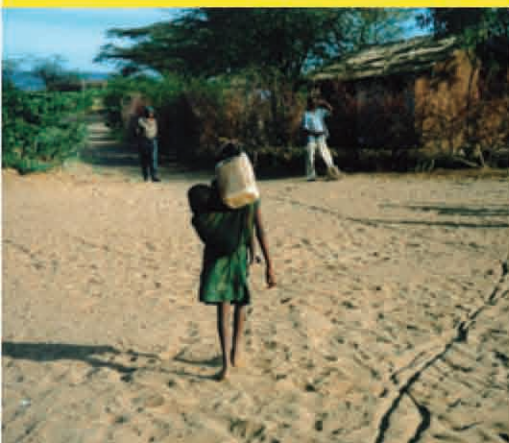


難民支援に 将来の希望への種を蒔く キャンプ・サダコ

Camp SADAKO



写真提供：山中千花



写真提供：山中千花

緒方貞子・第8代高等弁務官の名にちなんで「キャンプ・サダコ」とは、UNHCRが現場のNGOの協力を得て1993年から2000年まで実施した研修プログラムです。大学生、大学院生及び社会人でボランティア休暇などを利用できる企業の方を対象に、約1ヶ月間自費で難民キャンプに滞在し、現場を実際に体験することで、難民問題への理解を深めてもらうことがその主な目的です。ケニアでの研修を皮切りに、当初は日本からの参加者のみだったこのプログラムも、各国からの参加者が加わるようになりました。日本からは、計62名が参加しています。UNHCR駐日事務所では、J-FUN(スパイスその⑦を参照)の枠組みで復活させたいと希望しており、関心のある学生を募っています。(関心のある方は随時事務所までご連絡ください。)

キャンプサダコは 私の人生の宝物

「魂のすべてを傾けられるものに出会った人は人生の大きな賜物を得られるだろう」。

これは高校卒業時の先生の言葉だ。難民キャンプに行ってから約10年を振り返り、まさにキャンプ・サダコは私の人生への大きな賜物であったと言える。なぜなら、難民の不条理に気づき、いかにして解決すべきかという人生の大きなテーマを得ることができたからだ。そのテーマに向かってキャンプ・サダコ卒業生の多くがそれぞれの立場で奮闘していることであろう。私達にとってキャンプ・サダコは、人生を確実に良い方向に変える機会だったと思う。



小学7年生のクラスにて 写真提供：山中千花

私が行ったカクマ難民キャンプの第一印象は、ゴミすらない物のなさ、40度を超える暑さと乾燥、スーダンの孤児の少年の多さだった。彼らと話す機会が増えるにつれ、物資不足の厳しさもさることながら、難民である以上は自分の将来を夢見ても叶える術がない、すなわち人生の選択肢がないという大きな閉塞感、そして、難民孤児達を含め誰もが生まれる場所・時代を選ばず、圧倒的な不平等も偶然にすぎないことへのやり場のない怒りなどに気付いた。良い境遇に生まれた者として、これらの不条理や、平和で安定した社会、持続可能な環境など人間の営みに不可欠なことに、もっとやるべきことがあるのではないか?と強く思うようになった。が、何からどう取組めばよいのか?少しぐらい取組んでも何も変わらない。キャンプ・サダコ卒業生で何度も夜通し語りあった。気持ちばかりが焦る日々が続いた。

しかし、確実に変えることができるのは、自分自身と、自らが属する集団・組織・業界である。その立場や機能を通して問題解決に取組むのが最も効果的だと気づいた。難民、平和、貧困、環境などあらゆる問題は繋がっており、私は企業に属しながら、環境という切り口から取組むことを決めた。現在勤める環境財団に異動し、自社の環境負荷低減のみならず、環境分野における人材の育成事業などに取組んでいる。具体的には、大学生をNGOに長期インターンシップで派遣し、環境をはじめ社会問題への意識を高め、その解決策を考えて取組むことを目指すものである。あらゆる難題は人間が作り出しているだけに、解決に取組む若者をどんどん増やしてゆこうと考えている。

「知識があっても行動しなければ、知らないのと同じである」という「知行合一」という言葉が陽明学にある。戦争は多くの場合、資源をめぐる起きていると言われる。地球環境の保全、サステナブルな資源管理ができれば、争いは確実に減り、難民の発生も減るのではないだろうか。環境分野での私の微々たる行動ではあるが、UNHCRがくれた人生の贈物への少しでものお礼になればと思っている。

1997年キャンプ・サダコ参加者：山中千花